



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始



法隆寺大鏡第四十六集挿圖解説

- 第一、金堂 金銅阿彌陀如來坐像
高二尺一寸
横一尺六寸八分
- 第二、同 同像斜面
- 第三、同 同像背面
- 第四、同 同像面部
- 第五、同 同像光背正面
- 第六、同 同像光背背面刻銘
- 第七、同 同像小須彌座正面
- 第八、同 同像小須彌座背面
- 第九、同 同像小須彌座側面其一
- 第十、同 同像小須彌座側面其二
- 第十一、同 同像大須彌座
- 第十二、第十四同 金銅觀世音菩薩立像
身長一尺八寸 高四寸四分
横七寸一分

本像の造立に就きては、第六圖なる光背の造像銘に詳かなり、試に其文を録すれば

奉銘願

觀世音菩薩

阿彌陀如來

大勢至菩薩

右去承徳季中白波入金堂使佛像造具自余以降一百余歳寺僧等毎

見須彌座之空殘屢悲端嚴像之水匿非實一寺之合悲爭无四隣之傷意
依斯勸進十方施主磨瑩三尊聖容于時寬喜三年三月八日法印權大僧都正觀四之
貞永元年八月五日法印權大僧都仰願本師阿彌陀伏乞本願聖靈納受
而面懇志不空各結緣然則斷惡修善之道漸以滿足矣
貞永元年八月 日
大勸進僧 觀俊
大佛師法橋康勝
銅工平國友

とあり、初の阿彌陀三尊像は承徳年中盜難に罹りて本體を存せず、須彌座空しく殘されて主無き有様を見るに忍びず、前權僧正範圓が寺務を執りし時、寬喜三年三月八日三尊佛の銘銘に従事し、貞永元年八月權大僧都覺遍寺務の時、功成りて之を供養すとの意なり、法隆寺別當記範圓僧正世代の條にも、

寬喜三年辛卯三月八日金堂西壇阿彌陀佛本鑄之但等身也同十四日
脇士奉鑄之大勸進菩提山靜恩淨覺房并賢了房觀俊法師
と載せ、銘文中には見えざるも、觀俊法師以外に菩提山靜恩淨覺房が
大勸進として周旋せる由を知るべし、抑々當初の三尊佛は聖徳太子
子及其母君間人皇后其妃高橋大郎女の本地に象どりて造れるものに
して、同じ金堂安置の藥師如來及釋迦三尊と相並び、其深の由緒
を有するものと知られたれば、盜難以後機を見て之を再興するに至
れるなり、同寺の古記を案ずるに天平十九年の資財帳には藥師佛釋
迦佛を收むるも、阿彌陀佛の名を録せざれば、當時は前に云へる如
き由緒の尊き阿彌陀三尊佛の存在せざりしを證すべく、其存置に就
きても上宮太子御一族の入滅より、幾多の星霜を経て後に造立せら

浄土宗の宗廟に自宗の宗廟を併置する事は、古くから行はれて来た事である。其の例として、大徳寺の宗廟を併置する事がある。

同慶寺の宗廟

其の宗廟は、

本願の宗廟に併置する事がある。其の宗廟は、

第十一回 同慶寺の宗廟

第十回 同慶寺の宗廟

第九回 同慶寺の宗廟

第八回 同慶寺の宗廟

第七回 同慶寺の宗廟

第六回 同慶寺の宗廟

第五回 同慶寺の宗廟

第四回 同慶寺の宗廟

第三回 同慶寺の宗廟

志願寺大鏡後四十六世開闢記

第二回 金堂 全開闢記

第一回 金堂 全開闢記

第十回 同慶寺の宗廟

第九回 同慶寺の宗廟

第八回 同慶寺の宗廟

第七回 同慶寺の宗廟

第六回 同慶寺の宗廟

第五回 同慶寺の宗廟

第四回 同慶寺の宗廟

第三回 同慶寺の宗廟

第二回 同慶寺の宗廟

第一回 同慶寺の宗廟

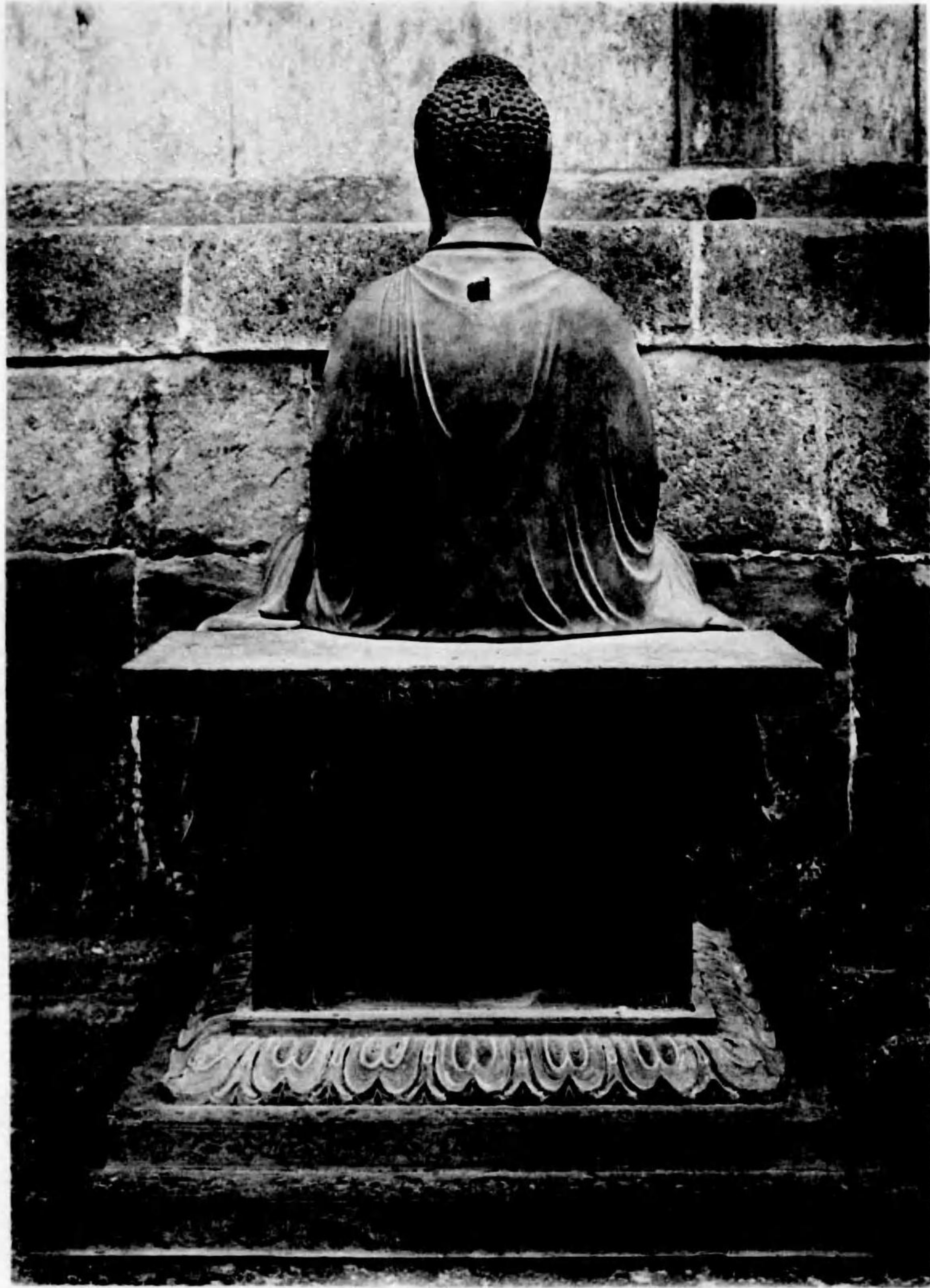
るべき性質のものとも思はれざれば、天平資財帳録の頃には後く
れたりとも存在すべき筈なるに、其載録せられざるは其者の存在せ
ざるが故なりと断言するの外なかるべし。尙近時発見せられたる金堂
日記に徴すれば、現今阿彌陀三尊を安置する大須彌座即ち第十一圓
に示せるものは、藤原時代の承暦比には金銅の小佛數體を奉安した
りしと傳へ、法隆寺別當記には光背銘に録する如き承徳年中の盜難
に關して何等の記載なきのみならず、承徳が前に云へる承暦以後の
年紀なるに併せ考ふれば、承徳の時盜難に罹るべき等身の阿彌陀三
尊を有せざりしを斷言すべく、従うて盜難事變さへも疑を挿むべき
餘地を存する事となる。金堂に於ける盜難は別當記に據れば圓融天
皇の天元五年より、寛喜三年本像造立の際に至るまで數度あり、其
都度多少佛像の被害を録すれども、西の間の阿彌陀如來と覺しきも
の見當らず、唯承久元年度には樂師島士二體彌陀脇士一體盜み出さ
れしが、間もなく復歸したりとの記事あり、阿彌陀三尊現存説を主張
し得られざるにあらねど、他の樂師釋迦と同じく金堂の一間に安置
せらるべき程の大阿彌陀像即ち寛喜造像の地位に在つて其形を略々
同うするものならしめば、承久より寛喜に至る迄僅の年間に在りて
故無くして其姿を失ふと無かるべく、是れあらば光背銘には承徳の
故事を載せずして、間近き事變を特筆すべき筈なり、要するにこれ
他の小阿彌陀の謂にして、大阿彌陀とは何等の關係なきものと見流
して可なり、範圍權正寺務の時、前集にも説ける如く本寺の再
興事業の大に起り、建築に造像に舊態一新の機運に向へるを以て、
本像造立の如き、最も重大の事業として企てられしなるべし、其因

由に至りては懸念なきにあらざれども、改めて發表するの機會に讓
らむ、本像は斯の如く全然再興の意味を以て造られたれば、其大さ
形状并に手法より上宮太子時代の造像法に準じ、或は東の間なる樂
師如來を模範として作れるが如く、光背の制亦同如來のものを摹し
たるに非ざるか、總て摹本を前にして刻若時代様を出さんと努めた
れども、鎌倉時代には自ら其時代精神あり、殊に備中法印運慶の子
として知られたる康勝が佛師として奉仕せし事なれば、父祖一流の
技術に自らなる腕の冴えも加はりて、誰が目にも運慶一流の名作と
より思はれざる寫實の妙味現はれ、微笑を含める面貌の床しさ、心
なき輩をして欣求の感に堪へざらしむるものあり、鎌倉彫刻の精彩
は人の知る如く運刀の自在に在りと雖も、其由りて來る所を尋ねれ
ば、奈良朝時代の彫塑の術に負ふ所多きを否むべからず、彼が軟材
料に自在の技を遺りしものは、やがて是に在りては硬材料となつて
現はれしとも謂つべく、強ちに突飛的なる現象にあらざるを思は、
康勝が奈良朝以前の藝術を寫さんとせしも亦藝術の好話頭にして、
寫して遂に自家の本事を露出せるも亦益々興味ある話柄と稱すべし、
康勝の名實實記に見ゆるのみなるに、今や此造像銘に由りて、其名
と作品とを確實に不朽にするを得たるは、獨り康勝の幸福のみなら
ず、又我が彫塑史上に有力なる事實を興ふるものと感喜するに餘り
あり、唯惜むらくは斯く迄に擬古様式をとりながら、定印の形式を
とれるは餘りに其當世様に走れるものと云ふべく、寺務範圍を始め
として智識僧もあらたらんに、此點に就いて考一考を吝めるにや、
此普通形式の採用はやがて其復古の意義にも多少の疑義を披むこと



石室佛造像

石室佛造像 五

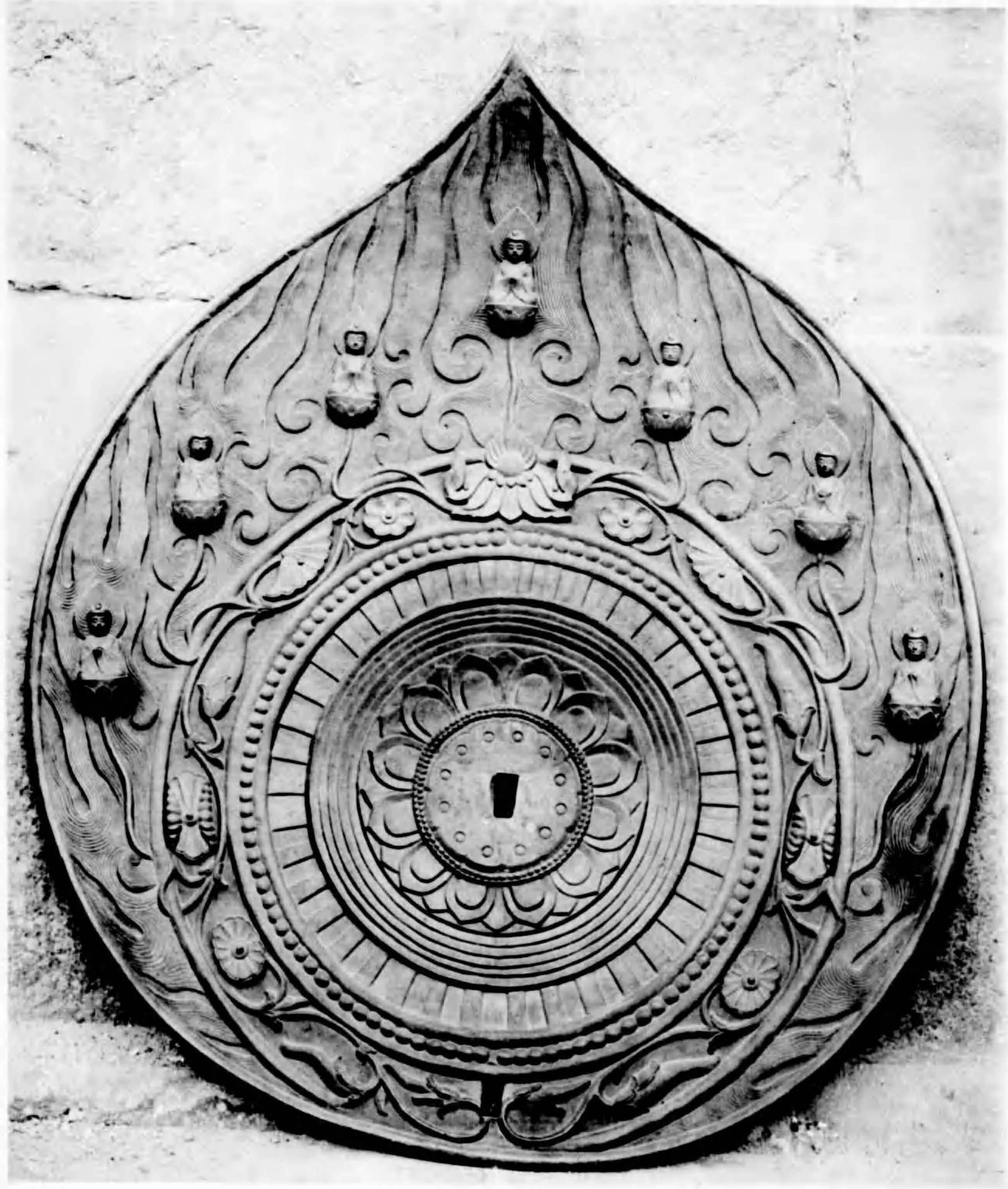


阿彌陀佛坐像



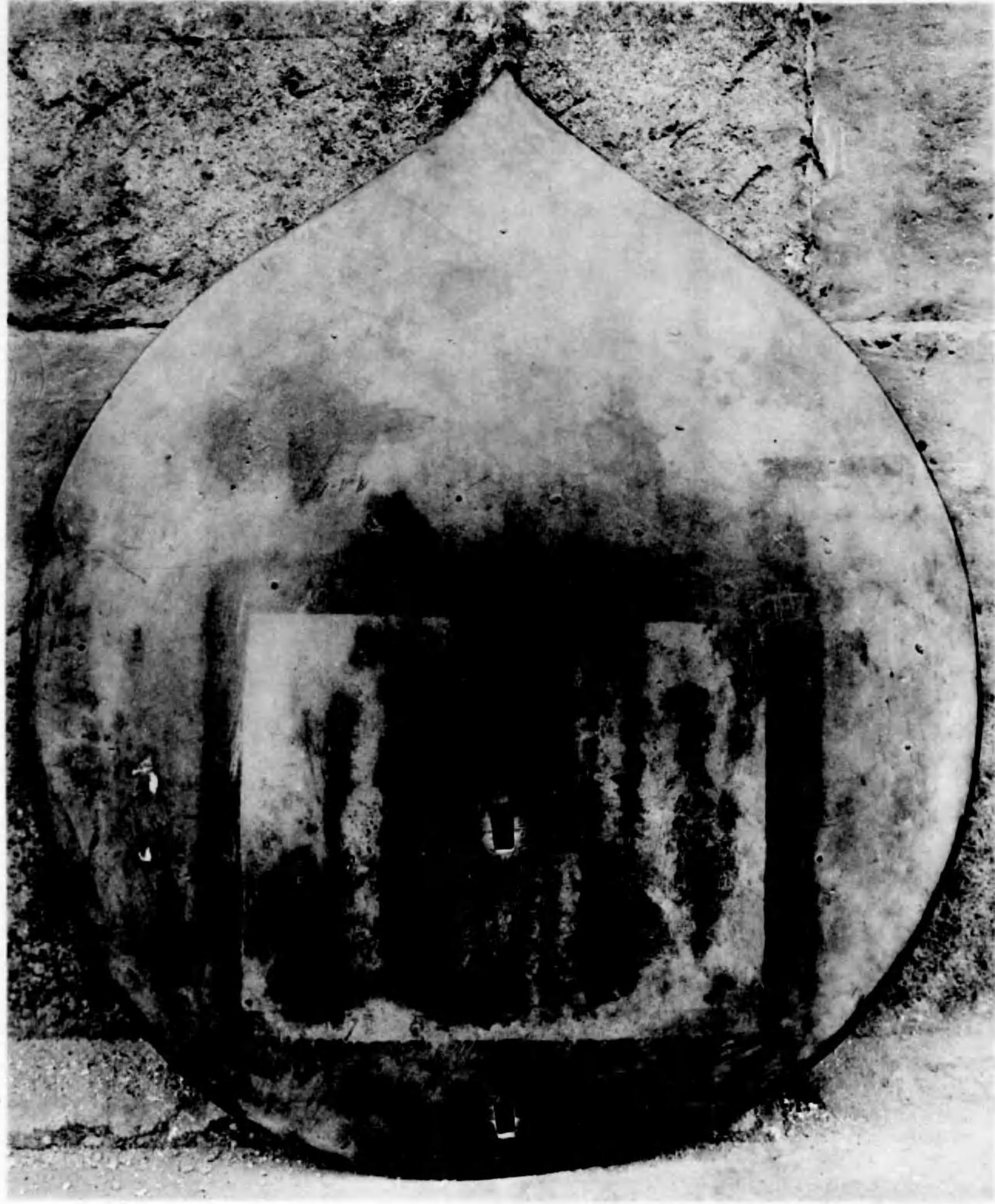
石室山

石室山佛龕內之坐佛



石鐘山

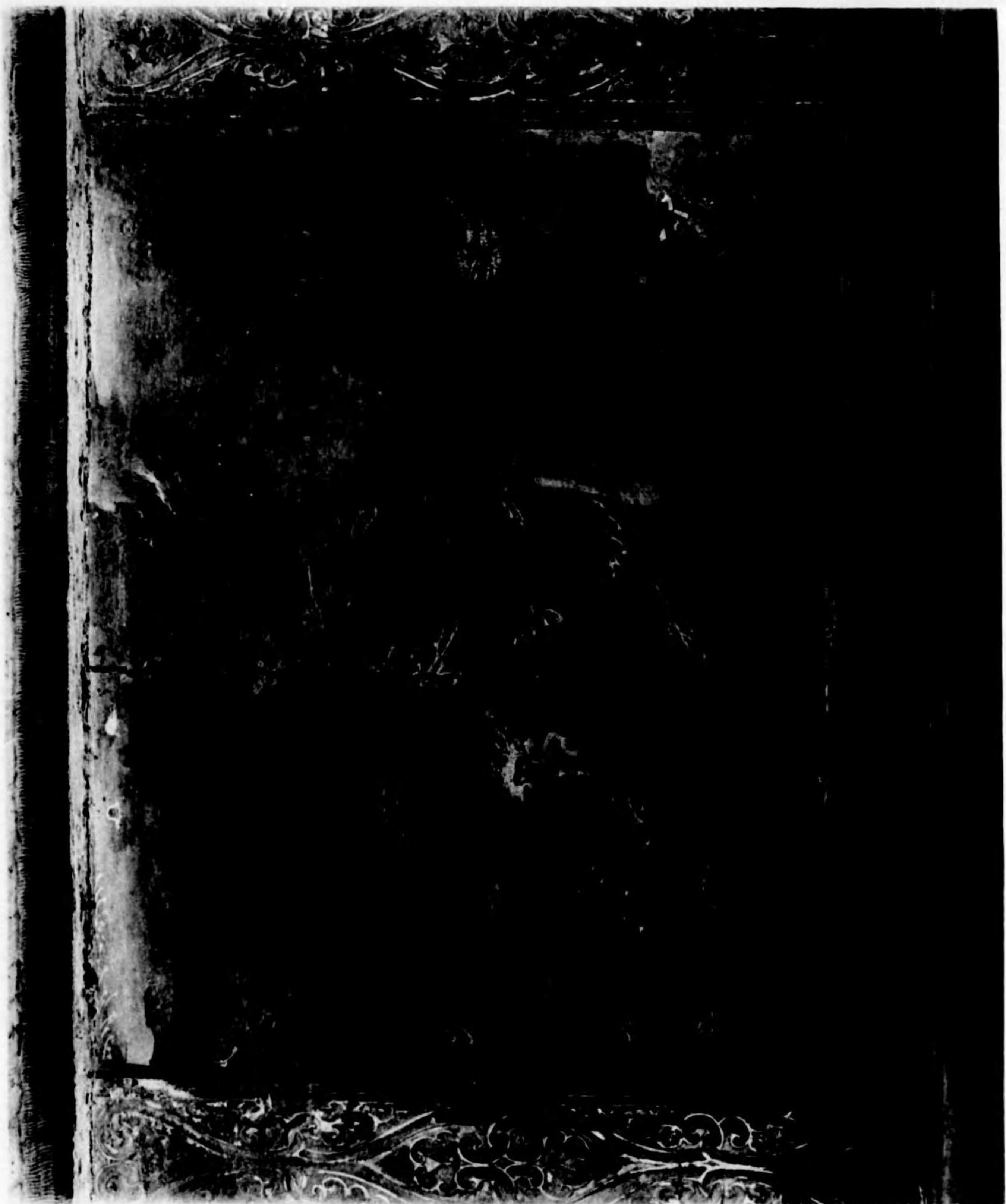
石鐘山



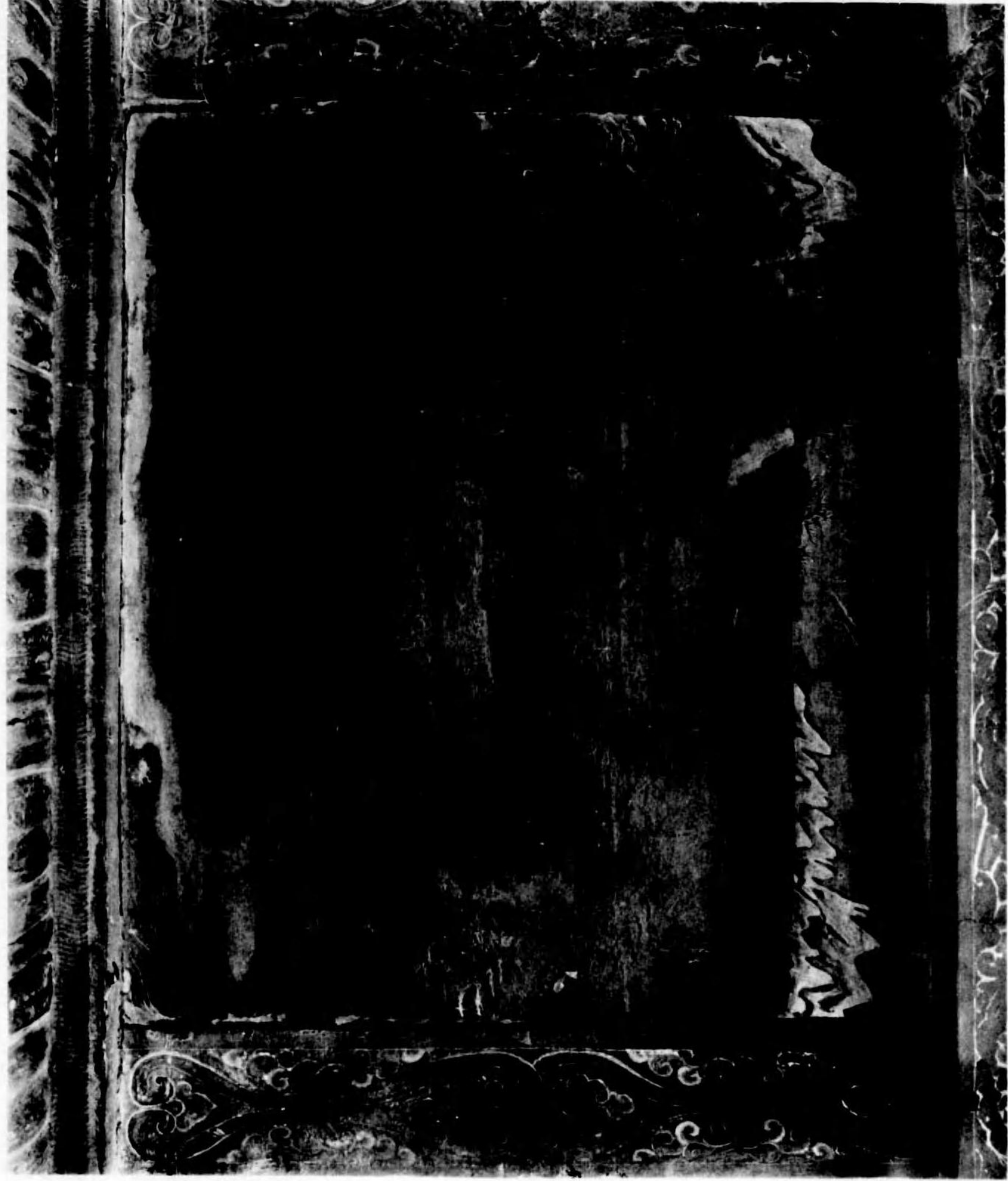
鐘

鐘

圖五 蘇州頤和園小春堂如意欄河欄板 局部



蘇州頤和園小春堂如意欄河欄板局部



吳國河圖景小景卷



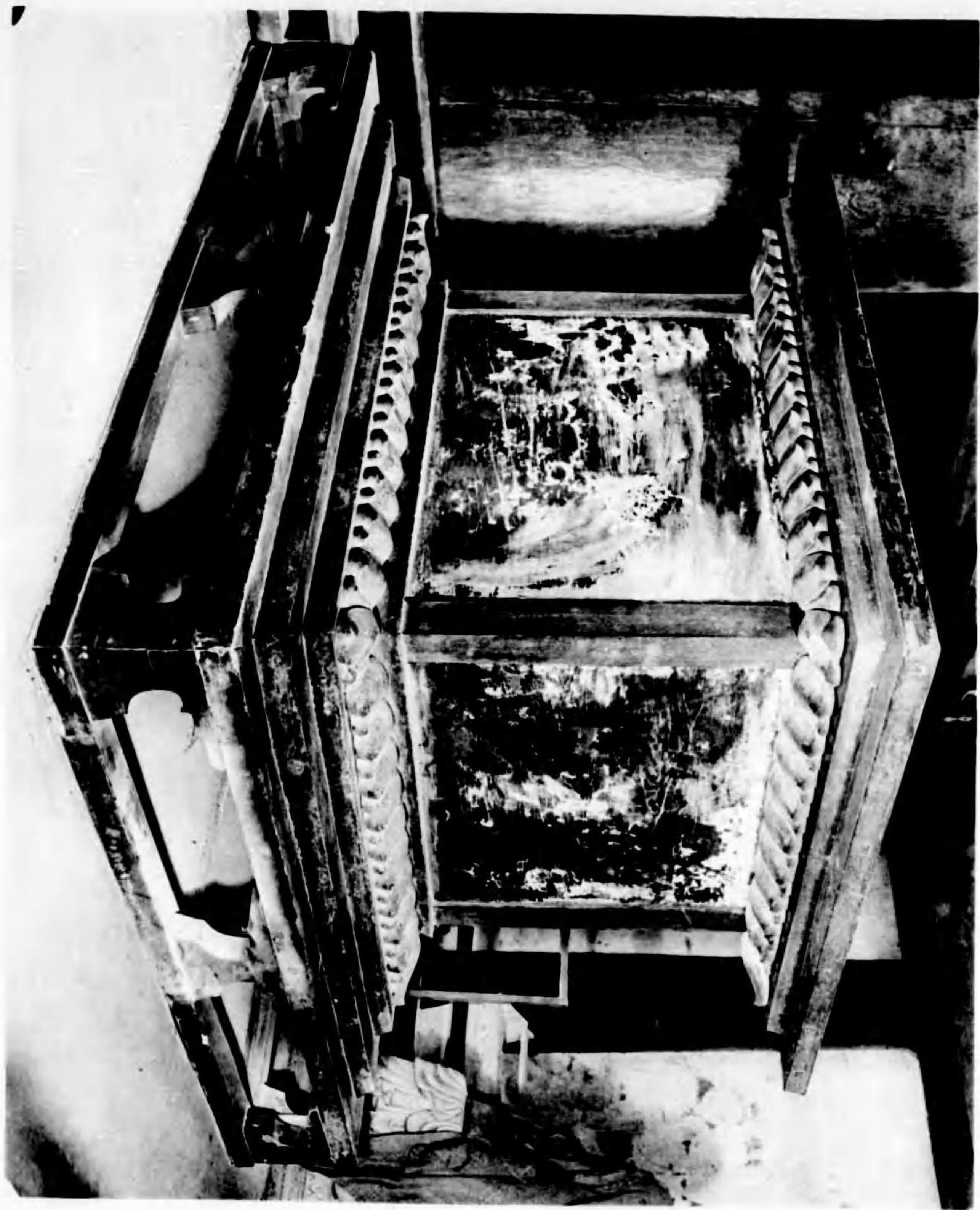
山水畫

山水畫 卷之二 第四十六號



石門

石門



阿爾及利亞的木製鐵道車

阿爾及利亞的木製鐵道車



國立中央研究院歷史語言研究所

一、自蘇州和興閣所藏全、唐文殊菩薩像、全、全



阿彌陀佛

阿彌陀佛(全身) 阿彌陀佛(全身) 阿彌陀佛(全身) 阿彌陀佛(全身)

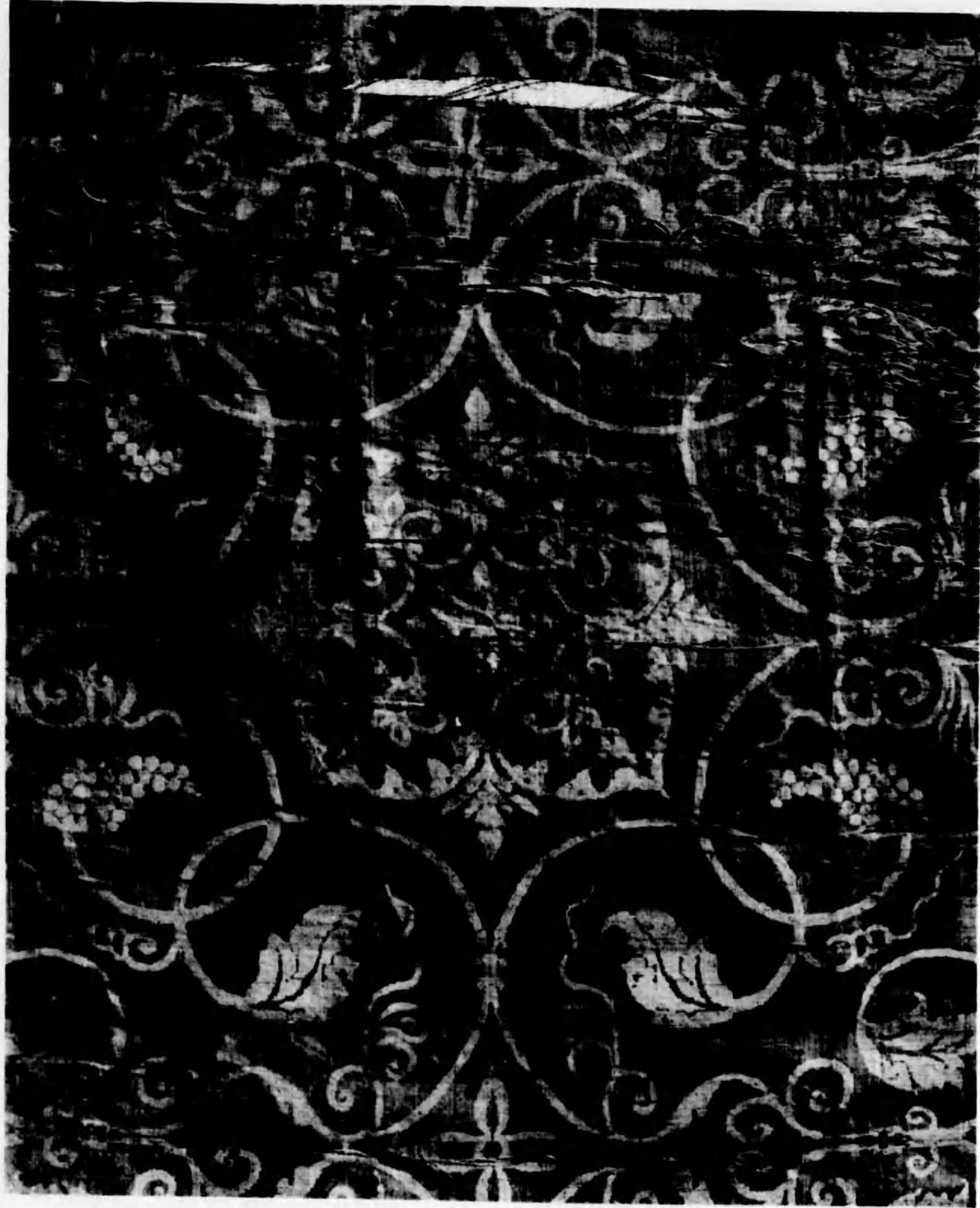


石印

全像... (The text is mirrored and difficult to read due to the image's orientation.)



天
子
之
印



104 05 10 11

104 05 10 11



1914-15



图二 纤维 4000

中国科学院植物研究所

大正六年八月廿七日印刷
大正六年八月三十日發行

大和國法隆寺藏版
東京美術學校編輯

發行者 東京市下谷區上根岸町百廿二番地 白石村治
印刷者 東京市下谷區中根岸町六十八番地 武田勝之助
印刷所 東京市下谷區中根岸町六十八番地 墨彩堂

終